

現場との協働による児童・生徒の作文能力の経年変化に関する研究

宮城 信(富山大学 人間発達科学部 准教授)

(研究計画の立案の背景) 本研究グループでは、作文コーパスを利用して児童らの文章作成能力を多角的な観点から解明していくことに取り組んでいる。特に本研究では、児童らの文章作成能力の経年変化や学年間の変化・発達について調査を進めることを目標とした。また、国語科の教科書では、多様な文種の文章が扱われており、多くの単元で書くことの課題が設定されているが、文種によっては具体的な書き方の指示が与えられないことが多い。例えば、本文の随筆を読んで、なんとなく随筆のイメージをつかんで「さあ書いてみよう」といった具合である。随筆の文体的特徴を捉えるのであれば、よく用いられる表現や言葉遣いについての知識が必要となる。いざ随筆指導をしようとしても、現状では児童・生徒が書く随筆がどのようなものであるか知見が十分に蓄積されていない。よって、本研究では大きく以上の2つを探求課題と位置付けた。

(仮説) 本研究では、以下2つの仮説をもって研究を進めた。まず、現場教員との交流の中で、「最近の子どもは文章が書けなくなった」という指摘を耳にし、それがどの程度妥当な評価であるのか、同条件で書かれた作文の使用語彙や表現がどの程度異なり、学年間や24年分の経年変化もあるのではないかと、さらに児童らが書く随筆には、他の文種の作文と比較して、使用語彙の偏り、使用頻度の高い表現、文末表現の特徴等の文体的特徴が見られるのではないかと、ということである。

(研究方法) 本研究では、児童らが書いた随筆を分析の資料とする。また経年調査を実施するために、24年前(1992年)に書かれた「手」を題とする作文と同条件で2016年に作文調査を実施し、両年代の作文を比較できる『「手」作文コーパス』を構築した。また、すでに構築済みの『児童・生徒作文コーパス』も参照資料として利用することとした。随筆特有の文体の抽出と時間的な変化という2つの観点から分析を行った。基礎資料となる「手」作文コーパスの文章量情報や形態論情報、語彙リスト等を作成し、共有資料として各共同研究者がそれぞれの課題をもって「手」作文コーパスを分析した。

本研究では、「手」作文コーパスを利用して児童生徒の文章作成能力の学年別発達過程と経年変化とを関連付けた立体的な計量的分析を試みた。基本的な文章量・語数・文数等の量的な違いを始めとして、漢語、指示詞(代名詞)、文末形式、副詞の使用頻度の傾向を調査して、学年間の差異と両年代間の差異について分析を行った。また、「手」作文が基本的には随筆的な内容であるので、使用語彙や表現の出現状況等を調査し、児童らが書く文章の特徴を抽出し、経験したことと違い・考えが書けているかという2つの観点から、経験の具体的な記述とそれに沿った思いや考えの記述が必要ではないかと捉えた。ここで「自分の経験を具体的に記述し、それを踏まえて考えたり感じたりして思索をめぐらせ書いたもの」と定義することを提起したい。最後にこれらの成果の検討・敷衍を目的とした現場教員との交流会を企画した。

本研究では他にも多くの知見を得ることができたが、他文種との比較は十分に行えなかった。今後子ども達の書く随筆のモデルを現場に提案していくにあたって、随筆の文体はこのようなものだといった客観的で語を越えて文や文章レベルのデータを取得する必要がある。また、さらに現場との協働関係を強めていかななくてはならない。いずれも今後の課題となろう。

(結果・成果) 本研究では、以下のような研究課題について考察し成果を得た。

- ・1992年と2016年の児童らの文章作成能力をいくつかの文法事項から検討したが、明示的な差異は見いだせなかった。
- ・「手」作文の分析から、児童らの書く随筆の特徴を抽出して注意点を挙げ、目指すべき随筆モデルを提案した。
- ・本研究で得られた知見を現場の教員らと意見交換し、児童らの書く作文の書き方とその指導について検討した。

これまで子ども達の文章作成能力の変化は、ベテラン教師らによる経験知から語られるのみであった。児童らに適切な作文指導を行うためには、何故教師らがそのように感じるのか、評価点を具体的につかむことは必須の課題である。いかに優秀な教師であっても一人の分析能力には自ずと限界がある。問題を明確にして解決に向かうために、国語教育学研究においても作文コーパスを利用するような客観的な観点の導入が喫緊の課題である。本研究はこれまでの経験主義的な国語科教育研究に一石を投じるものと考えている。作文コーパスを利用した研究には十分な妥当性があると考えられるが、今回の本研究での1992年と2016年の調査では明確な差異を見出すことはできなかった。よって、ここまでの研究結果からは「最近の子ども達は作文が書けなくなった」という指摘を否定する結果が得られたことになる。しかしながら、本研究で取り上げた観点以外にも、語の使い分けや表現の多様性、文章の構成等に関する点で違いが見られる可能性がある。実際に、一部の文末形式、程度副詞で、学年間に文体にあった選択の萌芽が確認された。これらを含め、単純に抽出できない要素をどのような形で計量化して分析することが有効であるのかが、児童らの文章作成能力の発達を探るための今後の課題となる。

共同研究者：阿部藤子、今田水穂、宗我部義則、富士原紀絵、松崎史周